

創刊1948年 2008年15月20日発行
日本ライオン会誌 3種郵便物認可
郵政省登録第012号



IN JAPAN
Official publication
of Lions Clubs
International

6
June 2008

第50巻
第12号

Lion

THEME 新世代ライオンズ
次代のライオンズを担う
若手会員の姿に迫る

若さを武器に 今、活躍が期待される 若獅子たちの素顔

取材・文／砂山幹博 写真／田中勝明

社会のあらゆる分野で若い力が待望されているが、ライオンズにおいてもここ数年、歴代の国際会長が、若い会員の招請を呼び掛けている。今年度のアマラスリヤ国際会長も同様の訴えを行い、更に「若い人たちが存分に力を発揮出来るよう、自分たちのクラブや活動の在り方を見直す必要がある」と、変化の必要性を説いている。

確かに、若い人がライオンズに参加することによって、奉仕活動に新たな活力と新鮮な発想がもたらされるであろうし、事業を推進する力がこれまで

以上に高まるだろう。そしてなにより、クラブに所属しているすべての会員にとって、若く新しい会員の存在は大きな刺激となるに違いない。

そこで、次代のリーダーとしてライオンズに新しい風を巻き起こしてくれそうな、40歳代の若手会員3人を取材した。3人とも早々に会長を務め、地区での役職経験もある、まさに今、脂の乗った旬のライオンたちである。

一人目は、川口ライオンズクラブの野元裕（1963年生まれ）。中東情勢に関する専門家として、度々マスメデ

ィアに登場されているので、ご存じの方も多いだろう。テレビで見せる確かな目に、ライオンズの将来像はどう写っているのだろうか。今年度は30複合地区政策・長期計画委員会副委員長として活躍中。

二人目は、神戸サン・ライオンズクラブの松村勉（1963年生まれ）。大学在学中に起業。26年にわたって培ってきた経営者としての視点を武器に、3年前の神戸市長選挙に立候補。また、昨年と今年で二つの大学院に通い、それぞれ修了するという行動派でもある。

今年度は、35・A地区指導力育成・会員研修委員会副委員長を務める。

最後は、塩釜ライオンズクラブの志賀重信（1959年生まれ）。来年度は32・C地区ガバナーに就任する。ライオンズに入会したのは33歳の時。以来、ゆつくりと時間をかけ、先輩ライオンのアドバイスに耳を傾けながら着々とリーダーシップを発揮するに必要な力を蓄えてきた。

タイプは異なるが、3人とも個性あふれる次代のリーダー。早速、その素顔に迫ってみよう。

■ 彩大野元裕

埼玉県・川口ライオンズクラブ。330
複合地区政策・長期計画委員会
副委員長。44歳。

写真：2004年、マニラ・フォーラムの
ジャパン・レセプションで司会を務め
た彩大野。専門のアラビア語だけで
はなく、英語も堪能な国際派ライオ
ンだ



■ 彩松村勉

兵庫県・神戸サン・ライオンズ
クラブ。335-A地区指導力育成・会員
研修委員会副委員長。44歳。

写真：今年、結成5周年を迎えたばかりの神戸サン・ライオンズクラブは40歳前後の会員が多く、活力にあふれている。彩松村はその第2代会長を務めた



■ 彩志賀重信

宮城県・塩釜ライオンズクラブ。332-
C地区副地区ガバナー。49歳。

写真：次年度のスタート・ダッシュに
向けて、鈴木嘉仁キャビネット幹事
予定者(右)、兒玉逸雄同会計予定者
らと打ち合わせを重ねる彩志賀。次
期キャビネットは彩志賀、彩鈴木を
始め40代の会員が主体になるという



「関西学院大学1年の時、イベント企画のサークル活動をしているうちに学生企業という形で起業しました。いわゆる学生ベンチャーの走りですね」と話すのは、神戸サン・ライオンズクラブの松村勉。

今 でこそ学生起業家が授業で実践研究を発表するような世の中だが、松村が創業した1985年当時は、大学を出れば就職するのが当たり前。学生起業どころかベンチャーを支援する空気すらなかった。

「何のために大学に行ったんだ」「絶対に就職しろ」「社会はそんなに甘くない」親や先生からそんな忠告を受けるが、テレビ番組のプロデューサーやイベントのプロモーションといった仕事が面白くてたまらない。悩んだ結果、学生起業家として社会に出ることに決めた。

89年に会社を法人化。地域活性化事業なども手がけるようになり、事業の幅は広がった。が、学生時代と違って社会は思った以上に厳しかった。取引先が急に冷たくなった。やっていることは以前と変わらないが、置かれた環境の違いに戸惑う日々。幾度となく逆境に立たされると、いつもあの言葉が耳をよぎった。

「社会はそんなに甘くない」
が、失敗も苦勞も数多く経験する中

不屈のベンチャー精神と、リーダーシップに大きな期待

■松村勉

1963年兵庫県生まれ。学生時代に起業し、卒業後事業を拡張。現在、株グローバルトゥエンティワン、株デジタルインキュベーターズなど4社の代表を務める。03年兵庫県・神戸サン・ライオンズクラブ入会、05年度クラブ会長、06年度335-A地区地域参画協働委員長。



で、新たに二つの関連会社も立ち上げるなど、会社は順調に伸びていった。すべてがうまく行っていたが、神戸の街に運命の95年1月17日が訪れた。

早

朝、ものすごい揺れに飛び起き、家族の安全を確認した松村は、その足で会社に向かう。ほとんど人がおらず、都市機能が失われた我が街に愕然とした。神戸の街を壊滅的な状況に追いやった阪神・淡路大震災の爪痕にショックを受ける一方で、松村は震災後の行政の対応に疑問を抱くようになる。市政を変えたいという気持ちはこの時に芽生えた。

「市の職員の中には、仕事熱心で優秀な人もたくさんいます。こうした人が十二分に能力を発揮するには新しい発想を持つリーダーが必要だし、何よりも正義感ある職員たちが報われる時代を作りたい」

2005年、神戸市長選に立候補。が、立候補を表明したのが告示9日前であったため、残された時間は23日しかなかった。限られた時間の中で「経営者感覚を市政に取り入れ、市民の立場に立った改革を」と訴えるものの、健闘むなしく落選。

「再出馬はあるのかと聞かれますが、目的は市長になることではなく、自分が正しいと思うことに対して正々堂々

あらゆる世界で闘い続けること。23日の中で私の主張に5万6千人もの人が賛同してくれました。こうした灯火は無駄には出来ません」

選

挙の後、起業20年目という節目を迎え、松村は社会で学んだことを理論的に整理するため学業に専念する。07年に兵庫県立大学応用情報科学研究科修士課程を、今年3月には京都大学法学研究科公共政策大学院を修了、二つの修士学位を取得した。

「仕事をやり繰りして、往復4時間かけて京都に通い、公共政策・行政改革・ITを専攻しました。41歳になって改めて学業を志したのは、学術研究より実践研究を優先させた、かつての学生時代に悔いが残っていたから」と話している。

選挙を通じて公人としての意識が強くなった松村に、今のライオンズを改革するなら、と聞いてみた。

「一つひとつのクラブは小さな集団かもしれませんが、ライオンズの旗の元に会員を動員出来るスケールメリットはもっと活用すべきだと思います。そのためには地区単位で動けるような仕組みづくりにも取り組むべきでしょう」
持ち前のチャレンジ精神を、今度はライオンズで発揮することが期待されている。

